

縦型1600トプレス機新設

ストローク長
国内最大650ミ
5億円を投資

日本圧延工業（本社）滋賀県東近江市、磯部正信社長 はこのほど、本社工場に縦型の1600トインパクトプレス機を1基新設した。プレス能力1000ト超かつ縦型の設備導入は同社として初めてで、ストローク長はインパクト用プレス機として国内最大の650ミを有する。主にアルミ消火器用容器や大型容器を製造する。投資額は、プレス機と付帯設備で3億6000万円、建屋が1億4000万円の計5億円。

日本圧延工業

導入したプレス機は台湾製の機械式でプレス能力は1600ト。回転数は上部が毎分25回転、下部15回転と高い生産能力を誇る。設備の新設に伴い、専用建屋（敷地面積400平方メートル）を本社工場の北東に新たに設けた。

プレス機の前後には、原料となるアルミスラグを自動供給するホッパーやコンベアをはじめ、成形品を取り出すラインを完備す

る。ラインの全自動化を目指し、プレス機の前後をさらに改良していく（磯部社長）。同社はこれまで、インパクト成形用のプレス機として本社工場に構型の500トと600ト、1000トと600トのそれぞれ1基の計3基を保有し、消火器用容器や浄水器カートリッジケース、エアゾール缶などを手掛けてきた。ただ、ここ数年は消火器用容器の一部に、

ユーザーが求めるアルミ材質の変化を受け、既存の1000トのプレス機では対応が困難な製品が始め、より能力の高いプレス設備の導入が急務となっていた。



新設したインパクトプレス機

冷間鍛造品といった新たなニーズも積極的に取り込む。当社は連続铸造圧延からインパクト成形だけでなく、素伍の加工といった下工程にも多様な設備とノウハウを有している。一貫生産できる強みをアピールしていく（同）。

アップ設備としても活用するほか、長尺品や生生産だけでなく、同社が容器の製造を手掛ける消火器分野は使用期限が定められており、更新時期には大量のアルミ容器が発生するため、同社は自社の溶解炉で廃容器をリサイクルできる点をアピールし、インパクト業者との差別化を図る。足元の需要環境は、国内自動車生産や半導体・液晶製造装置分野の減速を受けて軟調に推移しているほか、アルミ新地金（NSP）価格の下落などで、今期（2020年7月期）の売り上げ見通しは期初の時点を前期並みの33億円を予想。また、さらなる景気の後退や新型コロナウイルスの拡大を受け、需要環境がさらに悪化する可能性も視野に入る。前期一般材やスラグ、加工品などの総生産販売量は6400ト。